

FD NEWSLETTER



CONTENTS

- F D 活動の日常化と全学化に向けて
- 公開授業
 - 「英語表現法」 < 2005. 11. 29 実施 >
 - 「教えることは学ぶことです」
 - 「公開授業を参観して」
 - 「原価計算論」 < 2005. 11. 30 実施 >
 - 「公開授業から得たもの」
 - 「公開授業を参観して」
 - 「情報理論」 < 2005. 12. 7 実施 >
 - 「公開授業の効果」
 - 「公開授業を参観して」
- 法科大学院における F D 活動
 - 「チームとしての教育のために」
- 総合科目・学際的科目における F D 活動
 - 総合 「欧米の教育と日本の教育」
 - 総合 「ポスト・モダンの世界」
 - 総合 「男性学・女性学」
 - 総合 「フェミニズム・ジェンダー」
 - 「社会科学論〔社会認識の思想〕」
- F D 推進委員会の今後の活動予定

F D 活動の日常化と全学化に向けて

『F D NEWSLETTER』の発行もすでに 6 回を数える。本号では、今年度 12 月に行われた F D 推進委員会主催の公開授業の取り組み、法科大学院における F D 活動、総合科目・学際的科目の F D 活動を取り上げる。

本学の F D 活動は急速な発展を遂げた。講習会の開催や学生による授業アンケートが定着しただけではない。今年度は、「英語表現法」、「原価計算論」、「情報理論」の 3 つの公開授業が行われた。本号では、これらの講義を担当された先生と講義を参観された先生の代表お一方に、公開授業に関する論稿をお寄せいただいた。公開授業は 2006 年度も継続して行うことになっている。公開授業の取り組みも順調にスタートしたといつてよい。

法科大学院では、“理論と実践の架橋”を合い言葉に、各授業が一つひとつしっかりと重ね上げられ、学生と教員、教員相互の無駄のないコミュニケーションが図られている。授業評価のみならず、第三者機関による授業参観も行われ、同じ専門分野の教員間では議事録をとって教授法を研究してもいる。本号では、学部の授業でも参考にすべきこうした法科大学院の先進的な取り組みについても、ご紹介いただいた。

本学の F D 活動は、すべての授業で取り込まれるようになった。総合講座も、非常勤講師の先生方をお願いしている科目も、その例外ではない。そこで、本号ではさらに、総合講座・学際的科目における F D 活動について、総合講座に準ずる学際的な講義も含めてその一端を紹介した。その際、非常勤の先生にご担当いただいている科目もあるので、その取り組みについてもご紹介くださるようお願いした。これらの総合的・学際的な科目のなかで、授業改善のための努力が日々なされていることも、本号所載の論稿からうかがうことができよう。

第 6 号の刊行により、『F D NEWSLETTER』の年 4 回の発行が定着した。発行された『F D NEWSLETTER』は、大学のホームページですべて閲覧できる。F D 活動全体の報告書である『F D 活動報告書』も、年 1 回刊行されている。これだけの取り組みをしている大学はあまりない。本学における F D 活動への取り組みは遅かった。しかし、内容的には急速にキャッチアップを遂げ、すでに最先端の領域に踏み込んだといえよう。本号が F D 活動の日常化と全学化の一つの契機となり、本学の F D 活動がさらなる発展を遂げることを期待したい。(F D 推進委員会委員：明石博行、高野秀夫)

公開授業

FD推進委員会の主催により、本学では最初の試みである公開授業を次のとおり行った。

- ・11月29日 1時限 高野 正夫「英語表現法」
- ・11月30日 2時限 猿山 義広「原価計算論」
- ・12月7日 1時限 西村 和夫「情報理論」

ここでは、授業を担当して下さった先生方と授業を参観していただいた先生方の感想を紹介する。今回の公開授業は試験的なものだが、FD推進委員会では、2006年度もさらなる方法上の工夫を凝らして実施すべく、検討を重ねている。このような取り組みを生かし、今後さらに授業改善や教育の質を高めるようFD活動を推進していきたいと考えている。

「教えることは学ぶことですよ」

文学部 高野 正夫 教授

今回FD推進委員会の開催になる最初の「公開授業」を実施する機会を与えて頂いて、一つ思い出した言葉があります。それは、私が学生だった30年以前に、ある先生の言われた「教えることは学ぶことですよ」というものです。それというものこの公開授業を通して、FD推進委員会の公開授業担当委員の先生方や、当日の公開授業を参観されてアンケートを回答して頂いた先生方や他のの方々、そしてクラスの学生の皆さんから幾つか学ぶことがあったからです。

私の授業は文学部英米文学科の2年生対象の「英語表現法」で、今年のテーマは、日常生活における様々な状況で使われる表現を口語的な英語で如何に表すかということで、11月29日の授業当日は、映画館や劇場などに関して使われる英語を教科書やプリントなどを中心にして学習するというものでした。内容としては基本的な英語の表現力を養成するというもので、基礎的な英語力を学生につけてもらうことに眼目を置いています。難易度は、3、4年生対象の科目よりは多少低く設定しておりますが、話したり、聞いたり、また書いたりする英語力の習得を目指す学生にとっては十分であったと思います。

FDの主要な目的の一つであります授業の質を高めるということに関して、公開授業の果たす役割には非常に大きな

ものがあることを今回大いに痛感いたしました。また、専門分野の違う多くの先生方に授業を見て頂くことは、授業を行う教員や、学生にとっても、普段とは全く異なった雰囲気や緊張感の中で授業を進めなければならないため、双方にとってはかなりの集中力が求められることにもなり、いつも以上に熱心に授業に取り組む姿勢が高まることにもなりました。そして個人的にも、新たな授業の進め方に何らかの示唆を得たような思いです。

また、意見交換会において、率直な意見やアドバイスを頂く機会があったことは、比較的自分の授業の進め方に慣れてしまっている私にとっては非常に参考になりました。様々な分野の先生方に異なった視点から授業を見て、日頃自分では気がつかなかった幾つかの点を指摘して頂くことは、新たな方法を学ぶことにもなり、その新鮮な経験を今後の授業改善に生かすことができるのです。英米文学科の学生の皆さんに総合的な英語力をつけてもらうことが教員にとっては最も大きな願いですが、そのためにも、より良い授業力を身につけることが求められているのでしょう。

「公開授業を参観して」

外国語部 岩崎 皇 助教授

教師の教え方を云々して大学で公開授業をするということに抵抗を感じる人は多いのではないかと思う。私も最初強い違和感を感じた。

小学校には授業参観というものがある。しかしそれは自分の子供の様子を見るためで、先生の良し悪しを観察するものではないと思う。

公開授業に対する違和感はどこから来るのだろうか。まず授業は人に見せるものではないような気がする。教場にいるなら授業をするか受けるかのどちらかであって、そのどちらでもない第三者の立場自体が不自然なのである。

授業は、教師と学生との対話である。一対一とはいかないが、一人一人に向かって話しかけているのである。そういう人と人のおしゃべりを盗み聞きするのは失礼なことではないか。もし聞くにしても、当人に気付かれぬようにそっと聞き耳を立てるものである。そういうことからして、授業を参観すること自体、私には一種後ろめたいものがあった。

また、教え方のよし悪しなど決めることができるのかという疑問がある。学生を頭ごなしに怒鳴りつけたりするような、駄目なことははっきりしているが、そんな極端なことは通常はない。うわごとのような支離滅裂なことを言い続けるということもありそうにない。説明が分かりづらいというのも、ものごと自体が難しければ説明しても難しく感ずるのは当然であって、少しでも分かり易くと噛み砕けば砕くほど説明に要する時間は長くなり、これまで通りの量を教えることは困難になる。更にまた、これが重要だと思っただが、教師の個性とかをどう評価するのだろうか。

こう書いてきて、はたと気付いたのだが、公開授業には新しい授業方法を提起するというやり方もあるはずである。中学のときにあったような気がする。実験授業とかいったのではないだろうか。これは個々の教員の教え方のよし悪しを見るのではなく、モデルを示すことが目的であり、模範授業とでもいったほうがいいのかもかもしれない。

改めて考えてみると、今回の公開授業は、みな模範授業であったことに気付く。そこで提起されたのは、学生に静かに聞くことばかり求めず、聞きつつ何か作業をさせなければいけない、ということだと私は理解した。つまり、教師が一方向的にしゃべってばかりいるような授業をするなということである。

一口に授業と言っても、科目によって、受講者数によってさまざまな状況があり得ることを知ることができたのも、私にとっては大きな収穫だった。たとえば、学生が授業に参加している者と、眺めている者とに見事に二極分解している大教場の授業など、学生の頃はあったのかも知れないが気付かなかったし、教師になってからも経験したことがなかったので、へんな言い方だが、それはそれで新鮮な驚きであった。しかし、これでは教え方云々どころの話ではないとも感じた次第である。

「公開授業から得たもの」

経営学部 猿山 義広 教授

昨年の 11 月 30 日に「原価計算論」という専門教育科目において公開授業を行い、経営学部の教員のみならず、経営学部以外の F D 推進委員の方々にも来ていただき、授業を批判

的に聴講していただいた。教場には学生と比較して少数の教職員しかいなかったにもかかわらず、久しぶりに教壇で緊張させてもらった。理由は、同僚の前で、授業の中身だけではなく、自分の話の論理性や説得力、立ち振る舞い、声のトーンといった部分でいい格好をしたいと思ったからである。結果的に、あまりうまくいかなかったが、よい意味での緊張感を味わうことができた。このことが今回、公開授業をやってみての最大の収穫である。

ほとんどの大学教員は、小・中・高の教員と違って、教えることについての専門的訓練を受けていない。したがって、私自身がそうであるように、教え方は自己流であり、大学で教えるはじめてからの数年の間は、うまく教えることに相当苦労したはずである。ところが、5 年、10 年、15 年と教え続けていくうちに、学生との年齢差が大きくなることもあって、自己流なりに落ち着いて教えられるようになってくる。そして同時に、よい意味での緊張感を失っていく。時間通りに教科書の内容を要約して伝えれば、論理性や説得力は本の中にあるはずだから、それで十分であり、変に張り切った立ち振る舞いや発声はエネルギーの浪費であると思うようになっていく。話の中身についてはほとんどすべて把握しているわけだから、もう余計な緊張はしなくなる。

私はこれまで、このように緊張せずに授業をこなせるようになることが教員としての進歩であると考えていた。だが、今回、原価計算については（失礼ながら）素人同然の経営学部以外の同僚を目の前にして、「貴重な時間を犠牲にして聴講してもらっているのだから、はじめての人でもわかるように、かつ面白く説明したい」という通常の授業であればあまり意識しなくなっていたことをへんに意識したため、いつもよりぎこちなくなってしまう。ところが、授業後の学生の反応は悪くなかった。いつもより丁寧でわかりやすかったという意見もあった。これは、私が教員としての進歩と考えていた緊張の低下は肝心の説明をとおりに一遍のものにしていった可能性が高いことを意味している。

誰が聴講してもわかりやすく面白い授業になるためにしるべき工夫を凝らし、その工夫が効果を上げられるよう授業をコントロールするという作業は、当然のことながら、教員に一定以上の労力と緊張を強いものであるが、そうした要素は授業をよりよいものにするうえで、やはり必要不可欠なものなのであろう。教員としてどんなに経験を積んでも、

よい意味での緊張をなくしてはいけないということに気づかせてくれた今回の公開授業に、ささやかながら感謝したい。



公開授業の様子



意見交換会

「公開授業を参観して」

経済学部 光岡 博美 教授

11月30日の猿山教授の公開授業（原価計算論）に参加しました。以下、簡単にこの授業についての感想を述べてみたいと思います。

まず、この授業は受講者が多く、授業教場も本学では最大規模の教場でした。また、2時限の講義にもかかわらず、出席学生の数も比較的多数で、その意味で活気のある授業であったと思います。

次に授業の内容や教材に関しては、教科書とは別に当日の講義内容に関する詳しい資料が配布されており、学生の理解度を深めるための準備も充分なものでした。さらに具体的な説明に関しては、会計学の講義であることから、黒板がフルに活用され、計算式や各種の計算が行われ、これでは教員も息が抜けず、なかなか大変だなあと感じました。授業の内容も事前に十分な準備がなされていると思いました。マイクの音量も適当で後部座席までよく聞こえました。そして、会計学には素人である私にもよく理解できました。

最後に学生の受講態度について感想を述べます。先にも述べたように比較的多数の学生が受講していることも関連し

て、後部座席に居る学生の私語が目立ちました。後部の席で授業を聞いていた者としては、何とかならないものかと多少のいらだちを感じたことを記憶しています。他方、前部座席で受講している学生は受講態度はまじめで熱心に授業に取り組んでいました。

結論的にいえば、大教場で授業に集中できない学生の意欲をどうやって引き出したらよいのかという検討課題が残されたのではないかと思います。

「公開授業の効果」

経営学部 西村 和夫 教授

たいへんでした。元来そそっかしいので新しい企画にともかくチャレンジしてみたものの、よく慣れた内容の授業であるにもかかわらず2週間前から準備を始め、前日は夜中までプリントを用意したりしていました。その甲斐があつてか、お蔭さまで授業はおおむね好評だったようです。直後の意見交換会では、マイクの使い方や、各種機器のスイッチ操作が巧みだという、本人が思ってもいない点が評価されたりしました。

公開授業の最大の効果は、授業が同僚から好意的に評価されることだと思いました。もちろん、具体的な改善点の指摘もたいへん参考になります。学生とは異なる視点からの経験者のアドバイスは貴重なものです。しかし、最大の効果は、授業が好意的に評価されることでした。学生からの授業アンケートによる評価も励みになりますが、同僚からの評価はもっと効果があるようです。学生と同じで、褒められれば励みになり、また努力します。研究については評価を受ける機会があるのですが、授業はいくら努力をしても評価されることが少なく、無限の徒労のような気にもなりかねない、かなり地味な仕事です。こういう機会に、日頃の努力の報酬を受けるのもよいと思いました。ですから、次回以降、他人の授業を参観したら、必ずどこか良いところを見つけて褒めてあげるようにしましょう。

公開授業のもう一つの効果は、よく準備をすることです。私の「情報理論」は、15年前から行っている授業です。それだけやっている、自分でも気づかないうちにどこか怠惰になっていたようです。いつしか、授業効果の100%を目指さず

に 85% くらいのところまで満足していたのかもしれませんが、常に授業改善の努力を忘れないためにも、こういう機会は重要でした。そういう意味で、私にとっての公開授業の意義は、授業の開始直前にはほとんど達成されていると思いました。とくに Web ページとプリントの作成に効果がありました。

私は、今回の公開授業の 3 講義すべてに出席しました。ほかの方の授業を見ていると、自分の授業のいろいろな改善点に気づきます。授業について客観的に 90 分間考えているというだけで、自分の想像の中で“あんなこともできる、こんなこともできる”と気づくことができました。講師の方から直接学べるだけでなく、授業という環境の中に身を置くというのが良い思考時間になるようです。それだけ、普段は授業について客観的には考えていないということになるのかもかもしれませんが。

最後にひとこと。今回の公開授業の実施者募集に、経営学部から 4 人の応募があったそうです。これは、経営学部のスタッフが授業に高い意識で臨んでいて、授業の改善意欲をもっていることを表していると思います。何でも経営・運営について考えるという学部の特色によるのかもしれませんが、残念ながら経営学部ばかりで公開授業をするわけにもいかないので、実施は 2 人だけになりました。応募なさりながら実施できなかった方には申し訳ない気持ちです。また、次回には、全学部等でさらに多くの皆さんの公開授業ができるとよいと思っています。



授業の様子

「公開授業を参観して」

文学部 土井 光祐 助教授

F D は、既に多くの大学が取り組んでおり、それ自体は珍しいものでなくなってきた。特に授業アンケートは着任一年目の私も前任校で経験済みであるし、学生の手厳しく的確な論評に毎回反省することしきりである。一方、公開授業は講

師としても参観者としても経験がなかったから、初めて参加した公開授業（経営学部・西村和夫先生担当「情報理論」）は大変有益な体験であった。内容の正確な理解にはほど遠いが、入念に準備された教材とその説明は実に明解で、プロジェクターを利用した資料の提示、板書やインターネットの適切な利用等いずれの点においても細やかな工夫が凝らされており、改めて自分の授業のお粗末さを再認識した次第である。少なくとも私に関しては、改善の余地が自覚できる間はとも公開授業など担当できそうにもない。

本来、組織としての F D は段階的に進展、成熟させていくべきもののようであるが、その第一義的な目的が教授者側の教育技術の反省と向上という点にあることは確かである。授業アンケートには学生の出席率や積極性に対する反省を促す設問もあるが、主旨はそこにはなく、あくまで教授者側の反省材料の一つとすることが暗に期待されているようでもある。要するに、学生の出席率の低迷や積極性の欠如は「授業がつまらないから」である可能性を否定できず、少なくともプロであるならばそのように捉えよ、ということになりそうである。単純に「退屈させない授業」を目指せばよいというわけではないだろうが、案外学生にはこれらが最重要の必要十分条件であったりする。「退屈だろうが内容は高度で為になる（はずの）授業」という抗弁は、ただそれだけであれば、とくに時代錯誤と見なされる状況でもある。自分の経験則に照らすと、単位認定を厳格にすれば「退屈」の二字は消えるはずとも感じるが、不合格の評価を下すのも F D の観点からすれば、これまで以上に確固たる裏付けが求められそうである。いずれにせよ受講生とのコミュニケーションが何よりも重要という点だけは間違いなさそうである。

法科大学院における F D 活動

月刊誌『法学セミナー』614 号（日本評論社）の「法科大学院探訪」の欄に駒澤大学法科大学院の教員と学生の「行学一如」の中で、“理論と実践の架橋”を合い言葉に授業は進められていることが紹介されている。100 分の授業は、積み木のように一つ一つしっかりと重ねあげられて、学生と教員、教員と教員：実務家教員と研究者教員の無駄のないコミュニケーションが見事に図られている。『学生による授業評価』

の実施、さらに第三者機関による『授業参観』もある。同じ専門分野の教員によるFDグループ活動では、議事録をとって本格的に教授法を研究している。一つの運命共同体のように朝から晩まで稼働している法科大学院は、幕末における吉田松陰の松下村塾のように日本の未来を築きあげる意気込みである。今年は、開設三年目に当たり、9月にはその成果が司法試験合格者の数字となって出る。



「チームとしての教育のために」

法科大学院 青野 博之 教授

はじめに

本法科大学院のカリキュラムは、1年次はすべて必修、2年次はほぼ必修であり、3年次になってようやく選択となる。3年次の科目は多くが展開・先端科目であり、将来どのような法曹を目指すかによって決まる。したがって、法科大学院における法曹養成教育の中心は、1年次と2年次の必修科目となる。法科大学院では、国民に信頼される、一定の能力を備えた法曹を養成しなければならない。成績評価・修了判定は厳格である。法科大学院修了後の司法試験は、法科大学院教育が的確にされているかを確かめるものであり、司法試験に「点としての選抜」の性格がなくなるのは、そのためである。

公開授業

学生は必修科目を履修するといっても、学部教育より時間が限られている。内容が重ならないようにするとともに、重要なテーマはどこかで必ず扱うようにしなければならない。そのため、それぞれの教員は、連絡を密にして、教育内容を調整する必要がある。法科大学院では、自分の授業の方法を工夫するために、他人の授業方法を見ることとしている。私の場合でいうと、同僚に、「後ろの方に視線を向けることが少ないように思いますが」とのアドバイスを受けた。自分

では、気が付かなかった点で、たいへんありがたかった。

総合演習

法科大学院では、実務と理論の架橋を測ることが重要であるので、実務家教員と研究者教員がつねに教育内容を話し合っている。それだけでなく、研究者教員同士も、分野横断的に教育内容を検討している。民法の問題というのは、試験の話であって、実際には、民事訴訟法や商法が絡んでくる。はっきり言って、民法上の権利を実現するためには、民事訴訟法を知らなければお話しにならない。そこで、民事法総合演習などの総合演習が開講されている。

教員のチームを作るために

お互いが教育内容や授業方法を知り、自由に率直に、いい点を学び、改善すべき点を改める。学生の授業評価とともに、教員相互の協力が、FDのためには、ぜひ必要である。



総合科目・学際的科目におけるFD活動

総合 「欧米の教育と日本の教育」

現行の新カリキュラムと総合分野設置の経緯
について

外国語部 岡崎 寿一郎 教授

現行の新カリキュラムは、平成8年(1996)に実施されました。その導入・実施にあたって、奈良康明学長は、「学問や技術の著しい進展は、専門教育の内容を飛躍的に増大させました。学際的な領域も広がりました。それに応じて専門教育にさくべき時間も増え、あるいは、そのカリキュラムも改訂を必要とされる面もでてきました。それに応じて、一般教育の考え方も変わってきています。・・・できるだけ多様なメニューの中から興味ある講義を選択する余地を多くして、この改革が学生諸君の勉学の意欲の増進に役立って欲しいし、独創力と創造力あふれる人材養成に資するものであってほしいと願っています。」(「駒澤大学学園通信」臨時号 1995

年11月30日)と、書いています。新カリキュラムの特色は、専門教育科目と全学共通科目を大別したことです。全学共通科目は、宗教教育科目、教養教育科目、外国語科目、保健体育科目に、さらに、教養教育科目は、人文分野・社会分野・自然分野・総合分野に区分されました。

講座「欧米の教育と日本の教育」は、総合分野〔～〕の総合に属します。講義の内容と目的について書きます。日本の大学は、1949年の教育改革(「六・三・三・四」の学制)で、アメリカの一般教育の理念を採用し、人文・社会・自然科学・体育・外国語のコースを専門課程の前に課してきました。それが、平成3年6月の文部省の大学設置基準改正によって改正されました。また、アメリカの大学も歴史的な変革を経て今日にいたっています。大学数は、現在、アメリカでは約3000校、日本は、約1000校をとともに越えています。しかし、ヨーロッパは、社会構造を戦前と変えず、大学も日本の戦前の数(旧大学令・48校)とほぼ同数です。進学率も近年まで10%前後でした。大学入試制度は、日本と異なり、入学資格認定制度が採用されています。(例、イギリスの〔A〕レベル、ドイツのアビトゥア、フランスのバカロレア、アメリカのSAT = Scholastic Achievement Test 等)

学校教育の目的は、批判力・創造力・継続力の養成にあります。教養教育の内容は、全人類に共通の遺産である文明史について明確なパースペクティブ(視野)を示すことです。講義では、文化相対論(異なる文化の風俗・習慣についての批判・評価と同時に、その風土・歴史的背景を十分に考慮する)に拠り、自国の歴史と文化を絶対視する価値観の単一化を排して、国際化の時代に即応したグローバルな教育観の確立を目指します。

総合 「ポスト・モダンの世界」

現代文明と主体性の問題

外国語部 丸小 哲雄 教授

本講座は、「近代化とは何か」を問うために、知の最前線の一つとしての「ポストモダンの世界」を開き、既成の概念や構造(合理精神と啓蒙思想)を批判し、現代文明の本質(日常世界の原型)を捉え、批判する主体的な能力を育むことにある。

生産資本主義社会(モダン)から消費資本主義社会(ポストモダン)への転換過程においてさまざまな研究領域の構造が変化し、個々の領域が相互に混在し貫入する形で発生して、社会的文化的な現象の背景にある現代文明の本質が見え難く、日常世界の生に確かな意味づけができない。構造の変化と日常世界との関連把握は、従来の特定の学問領域では収まりきれず、個別的な分野を超えた知の活用が求められている。知識や情報・文献実証主義に呑み込まれず、個別のジャンルを独立させないで、現代文明の本質に向けた鳥瞰的な動向の理解は、専門科目へ進む前の助走として、有益である。例えば、ヒトゲノム計画・遺伝子操作・バイオ、脳死・臓器移植・対外受精・出生前診断、テロや感染、食物連鎖、地球温暖化、核兵器解体といった科学研究の問題は、政治と経済と法律とに関わり、倫理や宗教や文学にも関わっており、文系と理系の二項区分や個別的な学問的編成では上手く捉えきれない。人間の遺伝子は宇宙からの借り物で、人間は地球に、地球は宇宙に依存し、タバコの吸殻を捨てる行為は宇宙の原則に反し異分野を越えていく。国の数だけの世界地図があり、人の数だけの人生と考え方がある一方で、現代文明の本質の把握は世界を一つの方向にまとめていく流れを作り、個別のジャンルが相互に関連しあって共通の意識(公共空間)を求め合う。専門ジャンルは誰にも開かれている。

本講義には近代化批判による現代文明論と主体性の確立という二つの大きな特徴がある。一つには、近代化における科学観・社会観・人間観を構造的・思想的に見直すために、拡散と収斂、自由と呪縛、規範と逸脱、監視(調教)権力と法的(処罰)権力といった相互運動の手法から横断的に近代知の権力の座(特権化された場)を移動・転倒させ、固定概念の構造をこじ開けて現実社会に直面する諸問題 = 出来事を歴史的に対象化して取り上げ、問題意識のレベルを高めることである。現代文明の本質と人間の本質的な姿が見えてくるからである。

二つには、聴講生自らが近代知批判の複眼的な思考や答えに達する過程(労働・言語・生命を否定する主体を確保するという逆説)のなかで、恣意的で都合のいい部分のつまみ食いせず、自ら置かれている現状を対象化して、日常世界にそれを重ね合わせて、「自分探し」(主体性の確立)を確保し、集団的・公共的・個人的・私人的「複数性の人間」の現実化を図ることである。自分に関わらない問題は決して自分

を高めないのである。

なお、本講義におけるキーワードは以下の通りである。

- 1) 近代化のキーワード：プリモダン・モダン・ポストモダン、エビステーメ、パラダイム、イデオロギー、ナショナリズムとファシズム、テクノロジー、リージョンナリズムとグローバリズム（飽食と飢饉、文化の衝突、環境問題、文化的社会的画一化現象）、イギリス産業革命・アメリカ独立革命・フランス革命・ロシア革命・中国革命と明治維新・日露戦争・戦後の比較対照など。
- 2) 思想史的キーワード：近代批判、民主化と人権、自由と平等、自由の逆説、権力と反権力、物象化と疎外、要求と欲望、生産と消費、貧富の格差、アウラと複製、進歩主義と理性批判、合理主義と排除の論理、ルサンチマン批判とニヒリズム、脱魔術化・脱権威化・脱土地化、大衆の反逆、大衆社会とエリート、リゾームと漂流、故郷喪失、大きな物語と小さな物語、法則性と多様性、差異化と差延化、監獄と病院、狂気の逆説、決定不可能性・重層的非決定など。
- 3) 主体性のキーワード：ホモ・リフレクト、自己言及の逆説、自己回帰のメカニズム、欠乏動機と差異動機、相対主義と個人主義、不安と非本来の自己と頹落、コミュニケーション能力とワード・パワー、携帯電話と利便性の罠、仮想現実、感性の練磨とチャレンジ精神、歴史感覚など。
- 4) 個別的なジャンル：学問と世間、言語の階層性、芸術の機能、精神分析、建築の変遷、広告の機能、世界万博の変遷、ファッション・モードとエロスの概念と変遷など。

総合 「女性学・男性学」

外国語部 杉山 秀子 教授

少子化時代の日本の女性と男性の生き方を一年間探ってみた。授業は教員の一方的な講義ではなく、授業に学生が積極的に参加し、自由な意見をたたかわせることができるためにグループを作り、テーマごとに発表してもらい、ディベートしてもらった。前期は学生が発表するという行為になれないせいか単なる発表だけに終わり、退屈で教員側も小言の一つ、二つも述べたこともあったが、後期は少しずつ、積極的に発言する学生も出てきて、結構おもしろくなっていった。

なるべく授業の内容を視覚化して理解してもらうためにこれまでロシア語研究室で買い集めたビデオや、東京都が支

えている青山のウイメンズ・プラザから借り受けたビデオやDVDを毎回放映した。ビデオやDVDはジェンダー・フリー、セクシュアル・ハラスメント、パワーハラスメント、ドメスティック・ヴァイオレンス、性同一性障害、性感染症など、テーマごとに20分から30分くらいにまとめられたものが多く、内容も簡潔なものが多かったので、学生が理解するのに役立ったと思う。

この講義では、単に知識の集積を伝達し、学生にそれらについて観念的、抽象的に理解してもらうのではなく、具体的、日常的な中でお互いに意識を高めていく方向をめざした。このためあらかじめ授業要項で提示した項目の中の何点かを立体的に学生に理解してもらうために外部から一人芝居の女優高橋りりす氏を授業に招き、実際にアメリカの大学院で指導教授から彼女が受けたセクハラ体験を下敷きにしてまとめられた『私は生きかえった りりすの一人芝居』を演じてもらい、その後客席にいる学生に質問や、ディスカッションをしてもらった。大学会館の二階の大部屋が急遽劇場に早変わりし、学生たちは、りりす氏の熱演にすっかり引き込まれていった。芝居のあった授業の翌週皆に感想を書いてもらった。そのなかの何人かの学生は「生の芝居は生まれて始めてみた。余りの生々しさに衝撃を受けた。」とか、ある男子学生は「私は今までの授業や、りりすさんの一人芝居を見てセクハラというのはとても女性にとって傷つくことなのだと思うと同時に今まで以上に重く受けとめて一人の人間としてセクハラをしないだけでなく、目撃したらとめることのできる人間になりたい。来年から社会人だが、仕事だけでなく、こういった環境も常に考えていきたい。」と素直な感想を寄せている。



『私は生きかえった

りりすの一人芝居』

総合 「フェミニズム・ジェンダー」

女性学、フェミニズム、ジェンダー論

経済学部非常勤講師 早川 紀代

この講座は、確か1998年に開設されて、私は2000年から担当している。私は歴史学（日本近・現代史 家族史・女性史）が専攻であるけれども、家族史を研究しているためか、女性学関係の講座を複数の大学で教えている。駒澤大学の本講座の特色は、「女性学、フェミニズム、ジェンダー論」という名称で、男女の社会的な、また私的な関係を問題にしてきた過程の歴史をそのまま講座タイトルにしていることと、短大をふくめ全学部の学生を対象にしていることだと思う。短大の履修生は少数であるけれども、とても熱心である。学部による履修生数の違い、また関心の違いはあまりないように思われる。以前は労働におけるジェンダー（男女間のさまざまな格差など）に関心をもつ学生、とくに4年生が多かったけれども、最近では性同一性障害や同性愛、ドメスティック・バイオレンスなどセクシュアリティの問題に学生の関心が移行してきている。私の専攻をいかにして家族（含皇室）の歴史をとりあげるが、家族（ビデオ使用）や家族と労働生活を両立させる問題にも毎年関心をもつ学生が少なからずいる。男子学生の方が考え方が変わっていくようだ。

私はなるべく学生との対話をふやすように努力して、講義中も教室をまわって学生の感想や意見を聞くようにしているが、学生はこのやりかたに賛否両論があるようだ。他の学生の考えがわかって参考になるという学生も多いが、とくに男女の学生が受講しているのでこの方法は今後も工夫をかさねて続けていきたい。知識としてではなく自分自身の問題として考えてもらうことが大切なので。他大学ではバトルがおきることがままあるが、駒澤の学生はおとなしい。3年前から夏休みの課題レポートを何人かの学生に報告してもらっている、これは討論にはならないけれど、フロアから質問がでたり、拍手がおきたりする。どのようにしたら、他学部の学生たちや男女学生のコミュニケーションをさらにはかかっていくことができるか、これが今後の課題である。

「社会科学論〔社会認識の思想〕」

私のFD・自己点検活動

経済学部非常勤講師 枝松 正行

駒澤大学の全学的なFD活動も本格化し、活動の裾野も拡がりつつあるようである。今回は非常勤講師の私までがFD推進委員会からニューズレターへの執筆依頼を受けた。バックナンバーを見ても、民主的で開放的な駒澤大学特有の熱気が伝わってくる。私も大いに刺激された。

私は総合科目・全学共通科目「社会科学論」と経営学部専門科目「経営管理論」を担当しているが、私のFD・自己点検活動の基本は単純なカード利用にある。学生たちに質問・意見・要望・苦情など何でも自由に書いて提出させ、翌週冒頭にそれらを匿名で紹介して応答する、これを必ず毎回行っているのである。そんな面倒なことを、とびっくりされるかもしれないが、実は少しも手間は掛けていない。毎回出席カードの裏面に書きたいことを書かせて、帰宅の電車で書き込みのあるカードを読むだけなのである。

この方法は、その日のうちに学生たちの反応が判り、次の授業での微調整が直ちに可能になるなど、学生たちとの意思疎通が手軽にできる点で私にとってメリットが大きい。学生たちにとっても、同世代の学生の思い掛けない質問や大人びた適切な意見などがいい刺激にもなっているらしい。カードを通じて学生同士で匿名の論争が起こるなど、授業も大いに活性化されて好評なので、今では私のすべての講義科目に共通する授業スタイルとなっている。

ところで、私の担当する「社会科学論」は学際的な科目である。これを学部横断的な総合科目として設定したのは駒澤大学のカリキュラム設計の見事な成功例の一つだろう。この講義では実際に、仏教学部・経済学部・法学部・経営学部・短期大学という5学部等の学生たちが一つの教場で、文字どおり学際的に学ぶ機会を与えられている。これがいかに適切な措置であったかは、カード利用の点検活動が実証した。カードとともに学生の所属学部を一緒に紹介するだけで、他学部間の学生交流がはっきりと意識され、現実に「社会科学論」的なメタ・レベルの対話空間が形成されているからである。

また、総合的な科目である「社会科学論」と「経営管理論」が通年制であることにも満足している。駒澤大学でも Semester制が導入されつつあるが、半期毎に受講者が変動するよ

うでは、体系的な全体を扱いきれず、教育の質も効果も、学生満足度も損なわれると思うからである。

全学的な「学生による授業アンケート」は個人的な自己点検活動の限界を補う点にこそ存在意義がある。全授業における相対評価はもちろんだが、私の授業に限ってみれば、全学「アンケート」には、全出席者に組織的に回答を要求し日頃サイレントな消極層から評価を得る手段として、一定の意味を感じている。他方、数値化と質問項目など、改善点も散見された。例えば、授業の難易度のベストは「最適」のはずだが、選択肢にない。現行では「ふつう」がそれであろうが、「非常に～」も最適を意味する場合があるので「～すぎる」としてはどうだろうか。また、進度の最適が「どちらとも言えない」も回答者は戸惑うだろう。

「学生による授業アンケート」は複数の大学で経験してきたが、駒澤大学のそれは重要な一点で優れていた。それは「集約結果」を年度中に開示し、当該年度の学生たちにフィードバックするように意図されていることである。他大学では、授業や試験・成績処理がすべて終了した後ようやく郵送されて来る。つまり、当該年度中の授業改善や学生との意思疎通の機会を永久に与えられず、次年度への一方的な反省材料としてのみ位置づけられているようである。ニューズレターの存在それ自体にも示されているが、オープンで建設的な駒澤方式を支持したいと感じた所以でもある。

F D 推進委員会の今後の活動予定

2006 年度授業アンケート実施スケジュールについて

前期終了科目は 7 月に実施し、後期・通年科目は、11 月のオータムフェスティバル明けに実施する予定である。

なお、授業アンケート対象科目（専任教員 2 科目、非常勤教員 1 科目）は、受講者数 20 人以上の科目（ただし、演習と集中講義を除く）の中から担当教員が選択する。

F D 活動についてご意見がありましたら各学部等の小委員会委員までお申し出ください。

編集後記

『F D NEWSLETTER』第 6 号の特集は、F D 推進委員会の中心的取り組みの一つとして今年度 12 月に開催した公開授業です。教えることの大切さ、プロの研究教員になることの厳しさを痛感しました。“One for All, All for One” --- 一つの授業は全ての授業のために、全ての授業は一つの授業のために。まさに一つの授業は、全ての授業を物語るような気がしました。毎年、当たり前の如く繰り返される大学の日常生活において、決して見逃してはならないと思いつつ、つい何気なく見落とししたり、見過ごして来てしまった“学生の視座に立脚した教育の大切さ”、その事を F D 活動は気付かせてくれました。学生は今、本当に何を求めているのか？時には、苦勞の連続で日本の将来を築き上げていかなければならない学生達に、一体何をしてあげたらよいのだろうか？あらためて、全学的に問いかけてみたい気持ちになりました。

今回の『F D NEWSLETTER』では、法科大学院の F D 活動、総合講座・学際的科目における F D の取り組みについても論稿をお寄せいただきました。これらの実践例からも、教育の改善に役立つ多くの示唆が得られます。F D 活動の日常化と全学化に向けた動きが定着してきていることも確認できるでしょう。

シェイクスピアは、“Well begun is half done.” --- “始めよければ、半ば完了”と述べています。何事も初めが肝心。桜が咲き、もうすぐ新学期が始まります。より良い授業を目指して再度気を引き締めなければならないと思っています。

大変お忙しいなか、公開授業を引き受けていただいた先生方、貴重な原稿を寄せて下さった先生方に、この場を借りてお礼を申し上げます。この『F D NEWSLETTER』がより良い教育のお役に立てば幸いに存じます。（明石博行、高野秀夫）

F D NEWSLETTER Mar.2006 第 6 号

発行日：2006 年 3 月 31 日

発行者：駒澤大学 F D 推進委員会

〒154-8525 東京都世田谷区駒沢 1-23-1

03-3418-9867 Fax 03-3418-9037

（事務局：総合企画室）